

西アフリカ日本語教育研究会の発足及び研究会の開催 —ベナン共和国「たけし日本語学校」が拓いた日本語教育の可能性—

アドゥアヨム・アヘゴ 希佳子 (宝塚大学)

1. 西アフリカ日本語教育研究会発足に至る経緯

西アフリカ (West Africa) とは、アフリカ大陸の西部で、サハラ砂漠の南側に位置する地域であり、以下の資料1の緑の部分を目指す。経済的に発展しているのはナイジェリア連邦共和国 (以下、ナイジェリア) 及びガーナ共和国 (以下、ガーナ) である。



資料1 西アフリカの位置⁽¹⁾

筆者はガーナ及びその西側の隣国であるトーゴ共和国 (以下、トーゴ) に家族のルーツがあり、日本語教育が全く行われていないトーゴにおいて、日本語教育を開拓したいという想いがある。しかし、一人でゼロから始めることは到底不可能であり、まずは西アフリカ日本語教育研究会を発足し、西アフリカにおける日本語教育の情報共有のためのネットワークを構築しようと考えた。そこで、トーゴの東側の隣国であるベナン共和国 (以下、ベナン) において、2003年に「たけし日本語学校」を設立した特定非営利活動法人IFE財団に連絡を取った。山道昌幸氏 (たけし日本語学校共同設立者、前駐日ベナン共和国特命全権大使特別顧問、特定非営利活動法人IFE代表理事) から返信があり、Zoom (Web会議ツール) 上で直接話す機会を得た。研究会を発足し、トーゴで日本語教育を始めた

いこと、第1回研究会において話題提供をお願いしたいこと、協力が得られるのであれば日本語教育学会2021年度グローバル人材奨励費に応募したいことなどを伝えた。山道氏からは、日本語教育の専門家に、たけし日本語学校に興味を持ってもらえたのはありがたいと歓迎され、全面的な協力が得られることとなった。山道氏の助言を得ながら、研究会の方向性や活動内容を検討し、2021年8月に西アフリカ日本語教育研究会を発足することとなった。

2. 2021年度研究会活動の概要

まず研究会ホームページ⁽²⁾の作成を行った。ホームページには、イベント情報のほか、西アフリカの日本語教育に関連する参考文献や、国際交流基金の調査に基づくガーナ及びベナンにおける日本語教育の実施状況などを掲載した。

次に、前出の山道氏とともにイベントの企画、準備を行い、2022年2月6日 (日) に第1回研究会を、2月26日 (土) に第2回研究会をオンラインで行うこととした。



資料2 第1回、第2回研究会のお知らせ (山道氏作成)



最後に、3月26日（土）に日本語教育学会主催の「世界中のグローバルにつながるオンライン日本語教育シリーズ第8弾—世界中の日本語教育関係者のためのオンライン交流会」において話題提供を行った。

3. 第1回研究会について

話題提供者は、前出の山道氏である。ベナンのたけし日本語学校について、メディアを通して耳にしたことがあるという人は多いであろう。しかし、「たけし」という名前から、ピートたけし氏の支援を受けてゾマホン・ルフィン氏が設立したものだと誤解している人も多い。たけし日本語学校を設立したのは、山道氏とゾマホン氏であり、ピートたけし氏は一円も支援していない⁽³⁾。たけし日本語学校の実情を知ってもらうとともに、参加者が遠い国ベナンのたけし日本語学校と各自の現場との接点を見つけ、日本語教育の本質やあり方について考え直すということをテーマに、第1回研究会を開催した。

3-1 第1回研究会の概要

まず、山道氏の自己紹介の後、たけし日本語学校の校舎、教室、授業の様子、学習者がたけし日本語学校の心得の暗唱を行う場面などの動画を視聴した。その後、ゾマホン氏との偶然の出会いから日本語学校設立までの経緯や、これまでの活動実績に関する説明があり、山道氏から見た日本語教育の問題点5点が提示された。例えば、ABEイニシアティブ（アフリカの若者のための産業人材育成イニシアティブ：African Business Education Initiative for Youth）は、留学生が英語で専門分野の授業を受講することが想定されており、日本語能力が必要とされていないため、たけし日本語学校の学習者の日本語学習へのモチベーションが下がるという弊害があったという。

山道氏による問題提起を受け、参加者は、今まで外国語を学んでよかったことは何かというテーマで、3~4人グループで10分間話し合い、padlet（オンラインの教育用掲示板）に話し合っ

た内容を書き込んだ。その後、山道氏より、自身の考える、ベナン人学習者が日本語を学ぶ意味について説明があった。一点目は、経済活動と文化交流の調和、つまり、経済活動には利益追求が発生するが、理性を保つためには文化理解、交流が必要で、そのために日本語が必要であるということである。二点目は、人材育成のためである。明治時代の日本のように、留学生自身が外国で学んだことを活かして自国を発展させるべきであるため、ベナン人が日本語を学ぶことが重要であるということである。三点目は、日本のプレゼンスの向上のためである。ベナンにはフランス、アメリカや中国のカルチャーセンターがあるが、日本のものはないため、日本という国自体が知られていない。国際社会において日本の知名度を向上させるために、日本語ができる学習者を育てることは重要である。

また、たけし日本語学校は、経済的・社会的地位に関係なく、情熱をもち、礼節を重んじる人に対して、等しく日本語と日本文化を教授するという設立理念に基づき、学費を無料にしているという説明があった。2010年のユニセフの調査によると、公用語のフランス語の成人識字率は56%であるが、たけし日本語学校では直接法で教えており、フランス語能力とは関係なくゼロから誰でも日本語を学べるため、平等に学習の機会を与えることが可能となっているという。

最後に、日本語教育は、単なる道具としての語学の教育に留まらないこと、日本語教育から始まる相互理解、国際協力を証明し、日本語教師・日本語教育の価値を高めたい、という山道氏の想いが伝えられた。たけし日本語学校設立前は、在ベナン日本大使館も、在日ベナン大使館も存在せず、国費留学生は皆無であった。しかし、地道な努力の甲斐あって両大使館は設立され、日本語学校設立から18年の間に日本に90人以上の留学生を送り出すことに成功した。留学生たちは日本で各自の専門分野を学んだ後、ベナンに戻り、国の発展に寄与している。日本語教育が、学習者一人一人の人生を大きく変え、人と人、国と国との交流を生んでいるのである。

山道氏の話題提供を受け、参加者は、山道氏への質問やコメント、研究会で学んだことや気づいたこと、興味を持ったことを以下の資料3のようにpadletに書き込んだ。30分程度山道氏が質問に回答し、研究会は終了した。

1. 今日の研究会で気づいたこと、学んだこと	2. 今日の研究会で興味深かったこと	3. 山道氏への質問	4. 山道氏へのメッセージ	5. その他
<p>海外での日本語教育の現状や、その課題、また日本人を育てることにまつなが、環境づくりに関するお話を伺いました。</p> <p>改めて気づかされた点、気づいたこと</p> <p>「授業」に対する理解も、自分の経験から改めて学ばせていただきました。</p> <p>日本語教育の重要性を改めて感じました。</p> <p>日本語教育の重要性を改めて感じました。</p>	<p>授業のやり方について、山道氏から伺ったことが非常に興味深かったです。</p> <p>日本語教育の重要性を改めて感じました。</p> <p>日本語教育の重要性を改めて感じました。</p>	<p>海外での日本語教育の現状や、その課題、また日本人を育てることにまつなが、環境づくりに関するお話を伺いました。</p> <p>改めて気づかされた点、気づいたこと</p> <p>「授業」に対する理解も、自分の経験から改めて学ばせていただきました。</p> <p>日本語教育の重要性を改めて感じました。</p> <p>日本語教育の重要性を改めて感じました。</p>	<p>山道先生、今日は貴重なお話をありがとうございました。大変勉強になりました。ありがとうございました。</p> <p>山道先生、今日は貴重なお話をありがとうございました。大変勉強になりました。ありがとうございました。</p>	<p>山道先生、今日は貴重なお話をありがとうございました。大変勉強になりました。ありがとうございました。</p> <p>山道先生、今日は貴重なお話をありがとうございました。大変勉強になりました。ありがとうございました。</p>

資料3 参加者によるpadletへの書き込み

3-2 第1回研究会参加者の反応

第1回研究会の申込者は111名、参加者は64名であった。国内外から参加があり、深夜のアフリカからの参加もあった。参加者は、日本語教育に携わる大学教員をはじめ、日本語学校の教師、日本語教師養成講座の受講生、一般企業の方など、多岐にわたっていた。研究会終了後のアンケート（43名回答）の結果は以下の通りである。

①興味深かったか ②気づきや学びがあったか

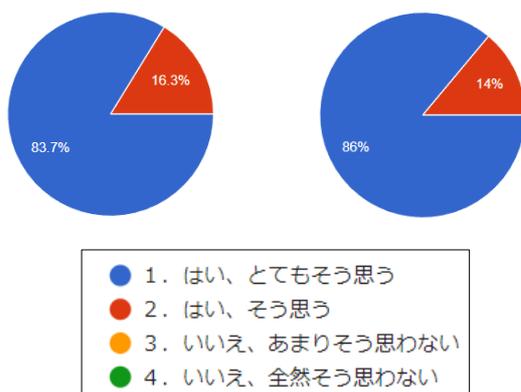


図1 第1回研究会のアンケート結果

以上により、参加者の満足度が高かったことがうかがえる。参加者の声を、アンケートの自由回答欄の記述及び、研究会中のpadletへの書き込みをもとに要約し、以下に紹介する。

- アフリカの現状や、教育者としての立場や考え方、恵まれない環境の中での学習者や環境について多く学べて有意義な時間だった。
- 環境が整っていないということは、本当にやりたいのかを問うよいチャンスであるという言葉が心に刺さった。
- 日本国内の環境がいいところにいるのに、ないもののせいにして動かない自分を再確認できた。
- 最初はそうではなかったはずなのに、いつのまにか語学を教えるだけの人になっている自分に気づかされた。もう一度初心を思い出そうと思う。
- 日本語教育に関わる方々の積み重ねが、国を動かすのだということを痛感した。

以上により、参加者がたけし日本語学校と各自の現場との接点を見つけ、日本語教育の本質やあり方について考え直すよい機会になったといえる。

4. 第2回研究会について

4-1 第2回研究会の概要

話題提供者は、たけし日本語学校の教務大石有香氏と教師石田泰久氏であった。二人の自己紹介の後、石田氏より、ベナンの教育制度に関する説明があった。

日本の小学1年生は週25コマ授業がある一方で、ベナンは週35コマ、そのうちの20コマをフランス語が占めているという。また、授業中机に突っ伏し、授業を受ける姿勢が整っていない学習者や、受動的な態度の学習者がいるとのことであったが、それは現地の授業スタイルの影響であり、その学習者が悪いわけではないため、教師は現地の授業スタイルを理解することが重要であるといった話があった。

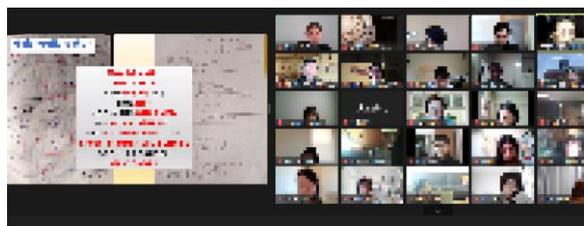
学習者の特徴や授業スケジュール、問題点などの説明の後、ベナンならではの授業の工夫が紹介されていた。それは、板書を消さないとい

うことである。教科書が手に入らない学習者が大半であるため、家に帰って復習できるよう、板書に必要な情報をすべて書き、ノートに写させる時間を取るということであった。

また、ベナンに住む日本人として気を付けていることとして、現地の人に敬意を持つとともに、過去の日本人への敬意を持つという点が挙げられていた。日本のパスポートが世界中で信頼されているというのは、過去の日本人たちの地道な努力の結果であり、日本人の代表として正しい行いをするよう常に心掛けているとのことであった。

日々起こる問題としては、留学が決まっても、留学することを他人に教えるとお金を欲しがる人が家に群がるため、教師をはじめ、誰にも教えない、たけし日本語学校が有名であるために利用される、といったことであった。

次に、大石氏から、聴解教材『おかげさまで』の開発に関する話があった。入学まで時間がある学習者などを対象に、学習のモチベーションを落とさず、独学で楽しく学べる教材として、2013年に開発したという。ベナンの代表的な祭りであるヤム祭りに日本人を誘うという設定で、一通り学べば、簡単な日本語のフレーズを使い、日本語の会話ができるようになっている。ベナンでは歌が生活の一部となるほど重要であるため、歌の著作権の問題解決のために奔走した末、歌を教材に取り入れることに成功したという。また、フランス語能力に関係なく学べるよう、媒介語は土着の言語であるフォン語となっている。アフリカの現地語で学べる日本語教材は世界初であり、現地で非常に歓迎されたという。



資料4 研究会の様子

最後に、第1回研究会同様に、大石氏、石田氏への質問やコメント、研究会で学んだことや気づいたこと、興味を持ったことをpadletに書き込んでもらい、質問への回答後、研究会は終了した。

4-2 第2回研究会参加者の反応

第2回研究会の申込者は109名、参加者は44名であった。参加者は、以下の図2の通り、日本語学校などの日本語教育関係者が最も多く、次に多かったのは、日本語教師養成講座の修了生や受講生など、これから日本語教師として働こうとしている方々であった。

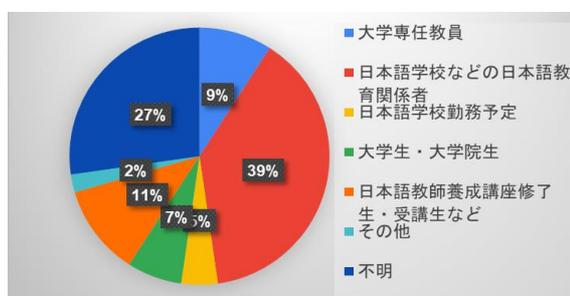


図2 第2回研究会参加者の属性

研究会終了後のアンケート（35名回答）の結果は以下の通りである。

① 興味深かったか ② 気づきや学びがあったか

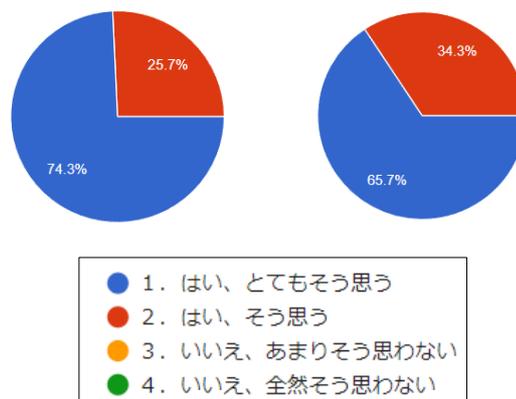


図3 第2回研究会のアンケート結果

以上により、第2回研究会も、参加者の満足度が高かったことがうかがえる。参加者の声を、アンケートの自由回答欄の記述及び、研究会中

のpadletへの書き込みをもとに要約して以下で紹介する。

- ・日本語指導をする上で現地の授業スタイルを知ることは重要だと思った。
- ・現地の文化を尊重し、共に学ぶ姿勢を大切にしている点に感銘を受けた。
- ・授業指針が非常に参考になった。(板書を消さない、辞書を引かせるなど)
- ・教材づくりの難しさ、やりがいやおもしろさを感じることができた。
- ・教材はあって当たり前のものだと思っていた。現地で自作する重要性に気づいた。

第2回研究会においても、参加者それぞれの気づきや学びがあったようである。

以上、第1回、第2回研究会の開催により、当研究会への入会者が37名となった。入会の動機は様々であった。例えば、長い間アフリカの発展に貢献したいという想いがあったが、具体的な行動をする機会がなかった、アフリカでボランティアをしたことがあり、将来アフリカで日本語を教えたいと思っている、第1回第2回研究会が興味深かったから、などである。入会者の中で、今後の研究会で話題提供者になってもよいという方は8名おり、今後の研究会活動への足がかりができた。

5. オンライン交流会への参加

2022年3月26日(土) 21:00-23:00に開催された「グローバルにつながるオンライン日本語教育シリーズ第8弾—世界中の日本語教育関係者のためのオンライン交流会」において、「西アフリカ日本語教育研究会の発足と今後の展望—日本語教育未実施の国トーゴにおける日本語教育の開拓を目指して」というタイトルで話題提供を行った。第1回、第2回研究会やプロジェクトの内容についての説明を行った。トーゴで日本語教育を始めるためにはまずトーゴ人に日本語学習動機を持ってもらうことが必要となること、

世界中の日本語学習者の学習動機は様々であることなどについて情報交換を行った。

6. 今後の展望

6-1 今後の研究会の活動内容

来年度以降は、以下の3点を主な活動内容としたいと考えている。

一つ目は、西アフリカの日本語教育事情を伝えるためのイベントを定期的に行うことである。第1回、第2回はベナンのたけし日本語学校についてであったが、次回以降はナイジェリアやガーナで日本語を教える方々を話題提供者として招き、日本語教育事情を共有する機会を提供したい。また、西アフリカで日本語を学んだ経験のある元学習者の方々にも話題提供を依頼することにより、学習者の視点からの日本語教育事情についても伝えたいと考えている。

二つ目は、日本語教育環境未整備の地域の日本語教育関係者との交流である。西アフリカに限らず、日本語教育環境が未整備の地域は世界中に数えきれないほどある。そのような地域で日本語教育に携わった経験のある方々に話題提供を依頼し、西アフリカとの共通点や相違点について考えるといったイベントを行いたいと考えている。

三つ目は、「トーゴに日本語学校を作ろうプロジェクト」を研究会の会員とともに進めるということである。1. で述べた通り、研究会を始めたきっかけは、トーゴで日本語教育を開拓したいという想いであった。しかし、問題は山積みである。例えば、日本語学校を創る目的は何か。学習者を日本に留学させるためであれば、大学と連携し、奨学金を確保しなければならないし、日本への就労を目的とするのであれば、ビザの発行や日本企業との連携が必要になってくる。そもそも、日本という国自体を知らない人が多いトーゴで、どうすれば日本に興味を持ってもらえるのか。こういった悩みや問題を研究会会員と共有し、相談しながら共にプロジェクトを進めていこうと考えている。

6-2 今後の研究内容

筆者の個人的な研究内容としては、まず、西アフリカの現地語による日本語教材の開発を進めたい。大石氏は、フォン語及びワーマ語の聴解教材を開発した。前述の通り、現地語で学べる教材を作ることは、植民地支配の名残である公用語の能力の如何に関わらず学ぶ機会を平等に与えられるということであり、エンパワメントにつながる。筆者は現在学習中であるトーゴのエウェ語及びガーナのアカン語の教材を開発したいと思っている。

また、筆者は近年、ケースメソッドという教授法について研究しているため、西アフリカの日本語教育機関におけるトラブルを集めたケース教材を開発したいと考えている。石田氏の話にあったような日々のトラブルは、日本語教師養成のための教材や、日本語教育の在り方を問い直すための教材として役に立つはずである。たけし日本語学校をはじめとする、西アフリカの日本語教育機関が乗り越えてきた様々な苦勞を貴重な資源として形に遺し、それらを疑似体験して学ぶための教材を開発したいと考えている。

7. 自身の得た学び

7-1 日本語教育の可能性

今回開催した研究会において、最も印象に残ったのは、山道氏の次の言葉である。

日本人がベナンに行って農業のやり方を教えれば、ベナンの人は農業しかできるようにならない。しかし、日本語を教えれば、学習者は日本の大学や大学院に留学し、物理や土木など、それぞれの専門分野を自らの力で学ぶことができる。

これがまさに日本語教育の持つ力であると思った。学習者それぞれが本来持っている可能性を広げるために力を貸すことができるのが、日本語教育であり、日本語教師なのである。そして、日本で学んだ留学生たちはベナンに戻り、

実際にそれぞれの専門分野の発展に寄与している。植民地時代のベナンの旧宗主国はフランスであるため、ベナン人のエリートは、通常、フランス語圏に留学する。しかし、たけし日本語学校は、無料ですべての人に日本語学習の機会を与えているため、フランス語の読み書きができない人であっても、何年もかけて日本語を学習し、習得し、日本に留学することが可能となる。ベナン人のかつての植民地支配から解放させ、エンパワメントさせる可能性をも、日本語教育は秘めているのである。

7-2 社会貢献という視点

山道氏や石田氏の話から、日本の先人たちへの敬意がうかがえる場面が何度かあった。例えば、次の言葉である。

日本人が日本のパスポートを持って様々な国に行けることは当たり前のことではない。日本の先人たちの血のにじむ努力があったからこそ、日本という国が信頼されるようになったのだ。その信頼を損なうような行為を絶対にしてはならない。

日本という国の信頼性は、過去から現在へ受け継がれてきたものである。では、将来の日本人へ、自分たちは何を遺すことができるのか。それは、別の言い方をすれば、いかに社会貢献できるのかということである。

たけし日本語学校の三名には、日本人として後世に遺したのものがある。山道氏はゼロから様々な苦勞を経て日本語学校を創り上げ、18年間継続し、日本に90名以上もの留学生を送り込んだ。大石氏は世界初となる、アフリカの現地語の聴解教材を開発した。そして、石田氏は日々ベナンにおいてベナン人に日本語を教え、学習者一人一人の心の中に日本語、そして日本を遺している。

人生において何かを成し遂げたい、社会に何かを遺したいという強い意志と情熱を持ち続け、環境やモノをゼロから創り出していくことは、並大抵の努力ではできない。しかし、苦勞の末

に成し遂げることができたら、社会に大きな喜びが生まれる。そのような大勢の人々の喜びを目にする喜びを、人生で一度は味わってみたい。

日々、目の前の学習者の日本語能力を伸ばすことだけを考えてはいないか。自分の授業にだけ目を向けてはいないか。あるいは、働いて得たお金で何かを買うだけで自己満足してはいないか。もしそうであれば、その人は日本語教育機関にただの労働力として消費され、人生を終えてしまう。日本語教育はもっと大きな可能性を秘めている。その可能性を十分に活かし、日本語教師・日本語教育の価値を高めていこうではないか。

以前の筆者は、何かしたいことがあったとしても、忙しい、大変だからできないと言い訳していた。しかし、研究会を開催して以来、大変なことがあればこのように思うことにしている。「自分が今大変だと思っていることは、山道氏が日本大使館もない地でゼロから日本語学校を創った大変さと比べたら、些細なことだ」。そう思えば、何でも前向きに取り組むことができる。

たけし日本語学校の三名の話聞くことにより、勇気をもらい、少しずつでもいいから自分の環境の中で動き出してみようと考えた参加者は多いであろう。そのような学びの場を創り出すことも、一つの社会貢献と言えるのかもしれない。社会貢献という視点から自分にできることをこれから模索していかなければならないと思った。

注

- (1) WikipediaのWest Africaのページの地図
(https://en.wikipedia.org/wiki/West_Africa?msclid=b9560c5db47611ec83b20a9cafb2e14a, 2022年3月31日閲覧)
に修正を加えたものである。
- (2) 西アフリカ日本語教育研究会ホームページ <https://www.japanese-language-education-in-west-africa.com/>
(2022年3月31日閲覧)
- (3) たけし日本語学校設立の経緯などはブログ「note たけし日本語学校」に詳しい。
https://note.com/takeshi_nihongo/ (2022年3月31日閲覧)

参考文献

- (1) 大石有香 (2017) 「なぜベナン共和国で日本語が学ばれているのか」『言語と交流』20, 106-112 言語と交流研究会

7-3 世界の人とつながる重要性

また、たけし日本語学校の三名から学んだのは、何かを成し遂げる際に、誰も一人ではできないということだ。強い意志と情熱を持ち続けられれば、そこに共感し、協力してくれる人が必ず現れる。

誰も知らないようなトーゴという国で日本語教育を始めたいという想いから始まった当研究会であるが、前述のように、研究会の趣旨に賛同した会員が37名集まった。温かい励ましの言葉をくれた会員も多い。自分の想いを公言し、行動に移し、仲間を得ることも重要であると学んだ。

8. おわりに

たけし日本語学校が教えてくれたこと、それは、日本語教育が本来持つ可能性の大きさを自覚し、他者と協力しながら強い意志と情熱を持って社会貢献をしていく覚悟があれば、どんなに厳しい環境であっても、日本語教育を拓いていくことが可能であるということである。トーゴで日本語教育を拓くという夢に向かって、会員みなさんと共に険しい道を一步ずつ歩んでいきたい。

今回、助成金をいただいたことで、この壮大な夢への第一歩を踏み出すことができた。日本語教育学会及び尚友倶楽部に心より感謝申し上げます。

最後に、たけし日本語学校の山道昌幸氏、大石有香氏、石田泰久氏に、深い敬意と感謝を示し、心より御礼申し上げます。

- (2) ゾマホン・ルフィン、小国秀宣（2005）『ゾマホンも知らないゾマホンの国—ベナン共和国イフェ日本語学校の今』明窓出版
- (3) 山道昌幸、大石有香（2019）「日本語教育の現場から ベナン共和国における IFE（イフェ）日本語学校」『ことばと文字』12, 146-154